



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Revision of Motherhood : Virginia Woolf's Creative Reproduction in Life and Art [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	金井, 彩香
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11062号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53788
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Saika_Kanai_abstract.pdf, 「論文内容の要旨」



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：金井彩香

学位論文題名

Revision of Motherhood: Virginia Woolf's Creative Reproduction in Life and Art

（母性に応えて：ヴァージニア・ウルフの自己再生と小説）

ヴァージニア・ウルフの人生における子供の不在は、彼女を生涯にわたって苦しめたが、同時に彼女の創作の糧となり小説を生み、女性作家としての歴史を形作った。本論文は、そうしたウルフの子供の不在への不安と創作を、トラウマ的経験と Posttraumatic Growth (PTG) のプロセスとして説明する。

ウルフの子供を持つことへの願望は、彼女の父権制社会への従属、そして彼女の深層にある母の存在への強迫観念を説明する。「子供を望むこと」は、女性の人生のあらゆる側面に関連づけられる。エイドリアン・リッチのいうように、子供を持つことは、女性が主体性を得られる唯一の経験である一方で、父権性的イデオロギーへの従属をも意味する。ナンシー・チョドロウやアイリス・マリオン・ヤングは、母親の役割は、生物学的なものではなく、社会的に構築された役割であると強調する。その上で、母性を得ることは、身体的、精神的両方の意味での女性らしさの「完全さ」をはかる重要な要素とみなされてきた。そして、シモーヌ・ド・ボーヴォワールのいうように、母性の獲得は自身の母親の役割の継承であり、最終的には母親からの解放と再生産、さらには父権制システムの再生産と維持を意味する。こうした「子供を望むこと」をめぐる多様な側面をふまえ、ウルフの作品を、母性あるいは子供の不在が提示しうる複数の観点から再読する。

本論文は、第1章の20世紀初頭イギリスの社会的・医学的背景を考察と、第2章から第5章のウルフの伝記的背景とその小説における考察の5章構成である。

第1章「The Trauma of Becoming a Mother: Society and Medicine in Post-Victorian England」では、ウルフの生きた20世紀初頭のイギリスの女性が子供を持つことの社会的・医学的背景を考察する。エドワード朝の幕開け後も、ヴィクトリア朝的イデオロギーは未だ影響力を持ち、女性たちは、母となるという特権／義務のため、社会的・身体的生活を犠牲にした。恐慌や戦争に伴う国力低下と人口減少をその母性によって補うことを求められ、女性らしさ＝母性の構図はますます確固たるものとなった。一方で、20世紀に進化をとげる科学的医療の現場が、父権制の価値観に支配され、産婦人科医学や女性のための医療の発展の遅れを生み、社会の母性への求めと母性を維持する医療の未熟さの不均衡が女性たちに苦悩をもたらした。

第2章「1895-1918: The Dawn of Post-trauma Art」では、ウルフの精神形成における母を中心としたヴィクトリア朝思想の影響と初期作品への投影を考察する。典型的な「家庭の天使」であった母ジュリア・ステューヴンの姿は、ウルフのロールモデルとして彼女の精神に形成されていた。1895年のジュリアの死は、それを確固なものとし、以来ウルフの精神を支配する。1912年、レナード・ウルフと結婚したウルフが、子供を持たない選択を強いられたことは、彼女を“improper”な女性と定義づける。同時期に執筆された『船出』（1915）は、豊かな海のイメージと船上の人々の空虚さを以て、彼女の不安を表象し、最終的な主人公の死は、ヴィクトリア朝理念によって制限される彼女の女性らしさへの不安を予見させる。『夜と昼』（1919）は、皮肉的に描かれた母娘関係を中心に、ジュリアの母親像を辿って生きる姉ヴァネッサへの意識を描き出す。ウルフの母が体現する母性への相反する意識、さらには“improper”な女性としての不安を提示する。

第3章「1919-1924: Art beyond Sane/Insane Truth」では、1910年代末からのウルフの文学的・精神的生活の成長変化とそれに呼応する小説の技巧的成熟を考察する。『ジェイコブの部屋』（1922）においては、保守的な社会の矛盾や逸脱者の苦悩を自己投影として解釈する。一方、『ダロウェイ夫人』（1925）では、社会に定義づけられた正気／狂気概念に疑問を呈し、そこに母性への疑念、母となることのない自身の人生への抵抗を示す。これら2作品をヴィクトリア朝のイデオロギーと正気／狂気といった既存概念の再構築の試みとして提示する。

第4章「1924-1927: Challenging Femininity」では、1920年代のウルフの同性愛関係に着目し、母の存在からの飛躍の過程を考察する。ヴィタ・サクヴィル・ウエストといった女性たちとの関係は、早期に母を失ったウルフの精神の平穏を保ち、再構築させ、作家としての精神成長を促す。『ダロウェイ夫人』では、同性愛関係によって保たれるウルフの未成熟な母性の表象を考察し、父権制社会からの解放を可能とする同性愛関係への願望を明らかにする。『燈台へ』（1927）では、作家である自身と彼女に根付く母親像との関係を再構築し、母親からの飛躍としての彼女にとっての書くことへの到達のプロセスを考察する。登場人物たちは、ウルフの精神の多面を投影し、その葛藤を演じ、父権制社会に植えつけられた母性のあいまいさと相対的に変化し得る女性像を描く。

第5章「Years after 1927: Wisdom to Live and Write」では、1927年以降のヴィタとの別離とウルフの生殖能力の喪失の意識によってもたらされる、ヴィクトリア朝的イデオロギー、そして性の概念からの解放を考察する。『オーランドー』（1928）における両性具有の概念は、「書くこと」と「母となること」の対立を解消する試みとして読み解く。『波』（1931）では、6人の登場人物たちの、ひとつの意識の流れに属するかのような一連の語り、定義されない自己、ただ肉体としての存在の強調を、父権制社会のイデオロギーに影響を受けないウルフ自身の語りの場としての役割を与えるための技巧として位置づける。

以上のように、ウルフの子供の不在は、イデオロギー、女性らしさ、そして書くことへの不安をもたらした。しかし、一方で、そうした不安が彼女の作家としての糧となり豊かな小説を形成したと説明できる。ロバート・A・ナイマイヤーは、物語りをPTGの一媒体として定義する。ウルフの人生は、トラウマとの戦いでありながら、同時に自身を書くことで表現することの探求であった。そして、そのプロセス全体が彼女にとってのPTGであった。ウルフの死の選択は、彼女の人生が、子供時代、戦争、死といった更なる不安に満ちていたことを説明するものであるが、そのことは、そうした不安が常に彼女を脅かし続けてきたことを提示する一方で、トラウマに満ちた人生、苦悩、そして成長の物語として彼女の文学を結論づけるものである。

巻末の補遺1「Life of Virginia Woolf」では、ウルフの伝記情報をまとめた家系図と年表、補遺2「An Annotated Bibliography: Historical Perceptions of Motherhood in Victorian and Edwardian England」では、母となることの社会的・医学的状況に関する注釈付き参考文献一覧を付している。